

「フランス革命」

江泉良幸

2024 年のパリオリンピックで、フランス革命が開会式のテーマとされたことは記憶に新しい。今も革命がフランス人のアイデンティティになっている。本発表では、革命が急速に進んだ歴史的背景、国王の逃亡や戦争を契機に民衆が親王政から反王政に転換していく過程、そして恐怖政治に陥った原因を中心に報告する。

1 章、革命はバスティユ襲撃から始まった！ (1789 年 7 月～89 年 10 月)

1-1. 新税の導入めぐり、174 ぶりに三部会の開催

1787 年、財政が悪化したルイ 16 世は、新税の導入を貴族階級に諮るが、拒否され、逆に三部会の招集を要求される。三部会は第一身分の聖職者、第二身分の貴族、第三身分の平民で構成される身分制議会である。

1789 年 5 月、174 ぶりに三部会が開会。しかし、身分別の裁決を主張する貴族と頭割りの裁決を主張する第三身分の対立が深まっていく。

6 月、アベ・シェイエスの提案により、第三身分は三部会と決別し、自らの集まりを「国民議会」と命名した。ルイ 16 世は議場を閉鎖して議会に圧力をかけるが、第三身分の議員たちは憲法制定まで議会を解散しない

ことを誓う。(「テニスコートの誓い」)

6 月末、様子見だった聖職者や貴族も国民議会に合流し、ルイ 16 世も折れて、「憲法制定国民議会」が発足。

1-2. 軍の動員がバスティユ牢獄襲撃を招く

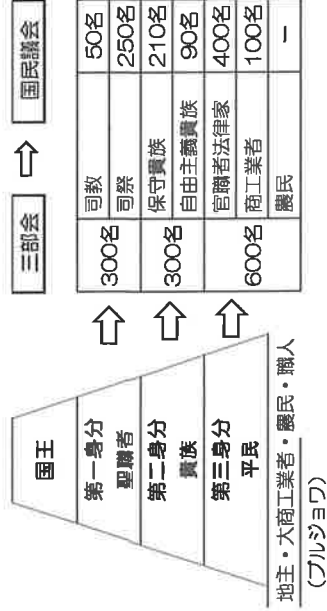
しかし、食料暴動が広がる中、ルイ 16 世は軍隊を動員した。民衆は国王の軍隊に対抗して市民軍の編成を決定した。7 月 14 日、民衆は武器を確保するために、「廃兵院」に向き、3 万の小銃を押収した。廃兵院の守備兵たちは上官の指示に背き、無抵抗で武器を引き渡したという。さらに、民衆は弾薬を求め、バスティユ牢獄を襲撃した。守備兵との銃撃戦の末、牢獄を占拠し、司令官を殺害した。バスティユ襲撃が引き金になって、封建的特権の廃止を要求する農民暴動が全国に広がった。

8 月 4 日、国民議会は暴動を鎮めるために、領主裁判権など封建的特権の廃止を決議した。しかし、法制化の過程で土地に関わる経済関係は骨抜きにされた。特に、封建地代の廃止については、地代 25 年分の一括納入を条件とする有償廃止にとどまった。農民は無償での譲渡を求めたため、革命の火種となった。

8 月 26 日、国民議会は主権在民・法の下の平等・言論の自由を定めた「人權宣言」を採択した。

1-3. 2 度目の軍隊の動員がヴェルサイユ行進を招く

しかし、ルイ 16 世は「封建制廃止の 8 月法令」と「人權宣言」を承認せず、二度目の軍隊の集結を命じた。10 月、反発した主婦を中心とする 7000 人の群衆と 2 万人の国民衛兵 (市民兵) が、国王一家が住むヴェ



ルサイユに押しかけた。ルイ 16 世は8月法令の承認と食料供給を約束せざるを得なくなった。翌日、国王一家はパリまで群衆によって連れ戻された。以降、ルイ 16 世は公然たる抵抗はできなくなった。こうした事態に、多くの貴族や軍の高級将校は亡命の道を選んだ。

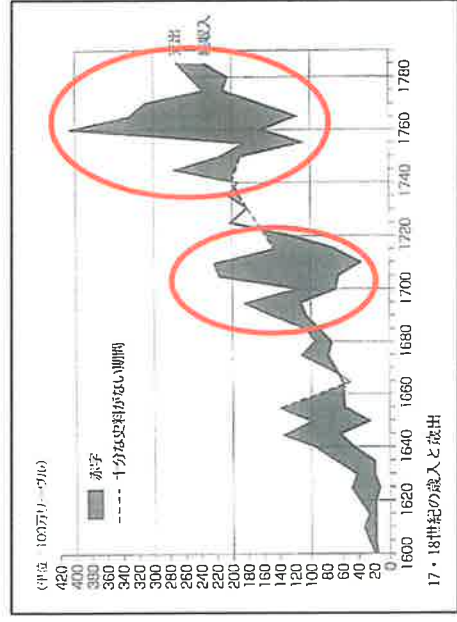
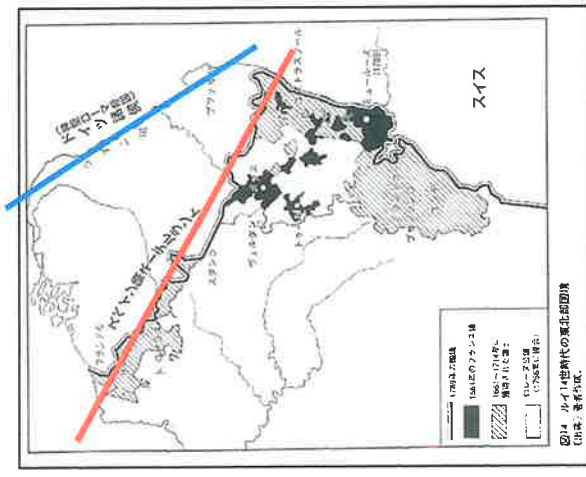
2章、度重なる戦争が革命を引き起こした（1600 年～1789 年 7 月）

なぜ革命が一気に広がったのか、その歴史的な背景を探る。

2-1、度重なる戦争による財政危機

ルイ 14 世はライン川を国境とする「自然国境説」に基づき、ベルギー、オランダなど周辺国に領土争いをしかけた。

- ①1667～68 年 ネーデルランド戦争 仏 VS 蘭・西・英
- ②1672～78 年 オランダ戦争 仏 VS 蘭・西・英・
- ③1689～97 年 ファルツ継承戦争 仏 VS 蘭・西・英・独
- ④1701～13 年 スペイン継承戦争 仏・西 VS 蘭・英・奥・普
- ⑤1740～48 年 オーストリア継承戦争
- ⑥1756～63 年 七年戦争
- ⑦1776～83 年 アメリカ独立戦争



グラフの下線の線が収入、上の線が支出、青色部が赤字を示す。戦争が続く時期は財政が大幅な赤字になった。「領土の拡大は気持ちのよい仕事である」(ルイ 14 世)「陛下は支出の決定にあたって、財政のことを考慮されたことはない」と財務総監コルベールは苦言を呈した。

2-2、税負担の極端な不平等

人口の8割を占める農民はがっちり収奪され、その負担率は55%を越えた。一方、聖職者や貴族は人頭税や二十分の一税も交渉によって免除された。税負担の極端な不平等が革命の原因である。

	納め先	負担率	農民	都市民	貴族	聖職者
年貢	領主	25%	○			
十分の一税	教会	10%	○			
租税 (タイユ)	国王	10～15%	○			
人頭税		5リーフル	○	○	△	△
二十分の一税		5%	○	○	△	△
間接税			○	○	○	○
(合計)			55%			

○印：負担 △：納税義務あるも交渉で免除

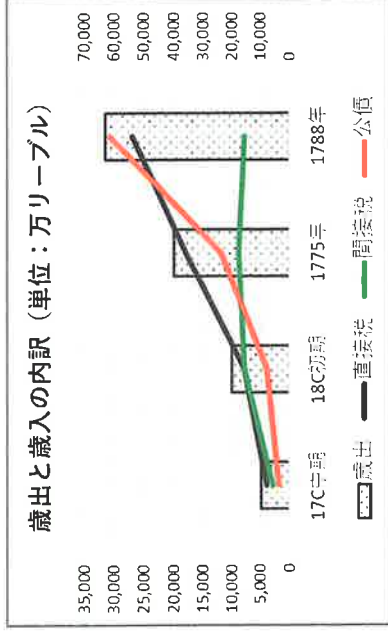
バスティーンコ襲撃が農民反乱に波及した背景に、「食料不足や物価高は貴族の陰謀のせい」と農民が信じた『陰謀論』があった。

2-3. 急増する直接税と国家の借金

右の図は歳入の内訳を示している。17世紀と比べ、直接税は7倍、公債（借金）は15倍に急増した。

一方、間接税は横ばいで推移している。

これは国王が間接税の増税を貴族に反対され、直接税として農民に転嫁せざるをえなかったためである。



2-4. 財務総監と貴族の対立

18世紀の後半、歴代の財務総監は、幾度となく特権身分への課税を試みるが、ことごとく潰された。

76年 チュルゴ 特権身分への課税等の改革を提案するが、貴族らの反対で罷免。

77年 ネッケル 徴税のため州議會の設置を提案するが、高等法院の抵抗を受け、罷免。

86年 カロンヌ 新税の新設を名士会に諮問するが、拒否され、罷免。

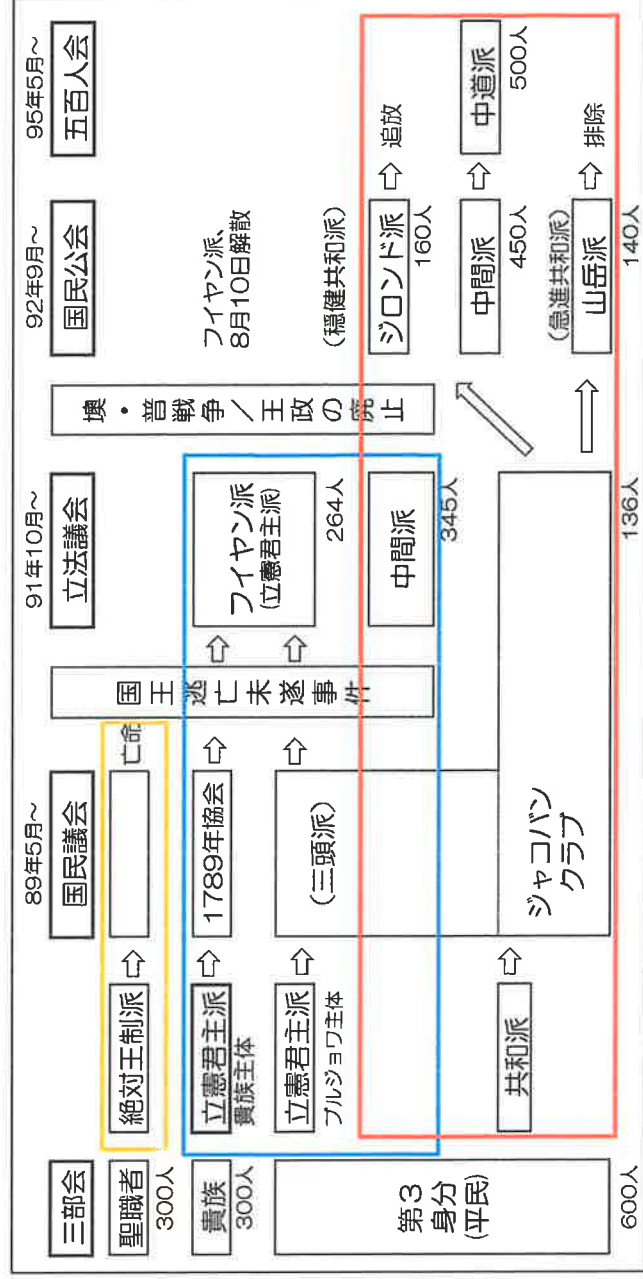
87年 プリエンス 名士会を解散し、高等法院と交渉。高等法院は三部会開催を要求、ルイ16世が承諾。

88年 ラモクシオン 高等法院の権限縮小を計画すると、「貴族の反乱」が発生し、挫折。辞任。

貴族らが公然と反対する背景には、財政危機に直面した国王が聖職者から借金し、ブルジョワに官職を売って金を工面してきたが、その代償として彼らの特権を拡大した経緯がある。特に、ルイ14世の死後、高等法院は国王の法令を登録する権利を復活させ、法令に対する拒否権を回復した。国王と高等法院の対立はスキャンダルとなり、革命がぼつ発すると、支配体制がもろくも瓦解する原因となった。

3章. 主な政治勢力の変遷

当初は右派の王政派が主導権を握るが、次第に共和派に主導権が移り、最後にその中間派が残る。



4章 国王の逃亡事件 (89年8月~91年9月)

4-1. 急速に進む封建制の廃止

1789年秋、国民議会は人権宣言を具体化する作業に着手した。

*89年11月 タレーランの提案で、教会財産を国有化し、競売に。国債「アッシニア」を発行。

*90年7月 「聖職者市民法」を制定。教会財産の没収や十分の一税の廃止により収入を失った聖職者を公務員として雇用。同時に、聖職者に対し「国・法・国民への忠誠を誓う」宣誓を求めた。

*90年11月 間接税を廃止して、直接税中心の税制に変更した。→財源が減少し、国債濫発を招く。

*91年3月 ギルドの廃止と営業の自由を確立。◀→ 91年6月 労働者の弾圧法、制定。

4-2. 改革が生む新たな対立

改革はブルジョワに利益をもたらす一方、他の階級には不満が蓄積した。次の3点は革命の火種であり続けた。

第一に、国庫債券「アッシニア」は濫発されて、インフレを招き、物価が高騰した。

第二に、封建地代の有償廃止の問題。

第三に、「聖職者市民法」による宣誓を拒否した聖職者は半数にのぼった。宣誓を拒否した僧侶の多くは

反革命の工作に暗躍した。

コラム1. アントワネットの享楽生活

オーストリアの作家ツヴァイクは著書「マリー・アントワネット」で次のように述べている。

1770年、アントワネットは14歳のとき、後のレイ16世と結婚する。しかし、アントワネットは7年間も夫の性的障害により不本意な結婚生活を余儀なくされた。舞踏会、賭博場など朝帰りの享乐的な生活にのめりこみ、貴族や民衆からひんしゅくを買った。兄のオーストリア皇帝の助言で手術を受けたレイ16世と正常な結婚生活が始まると、81年、王子が誕生した。それでも、素行は収まらず、民衆の心は再び離れた。国王の弟や叔母のサロンに反国王勢力が集まるようになり、国王一家は孤立を深めていく。

また、フランス革命の研究者である河野健二氏によると、王妃は貴族の反税闘争にも利用されたという。

4-3. 国王のヴァレンヌ逃亡事件と党派の対立激化

封建制の廃止が進む中、91年6月20日、国王一家がパリから逃亡を謀り、オーストリアとの国境近くのヴァレンヌで拘束されるという事件が起きた。

国王の逃亡事件は党派間に深刻な対立をもたらした。

*急進派は国王の廃位と共和政の実現を主張した。

*多数派のジャコバン・クラブは国王の裁判を主張する共和派と、国王の逃亡を「誘拐」と捻じ曲げて擁護する立憲王政派の三頭派に分裂した。

*そして、三頭派は貴族のラ・ファイエットとともに立憲君主派フィヤンクラブを結成した。

*9月、多数派のフィヤンクラブは立憲君主制と制限選挙を柱とする自由主義的「1991年憲法」の制定作業を急いだ。

4-4. 国王の逃亡事件をめぐる周辺国との緊張

当初フランス革命に対して静観していた周辺国は、貴族の亡命、教会財産の没収、国王の逃亡と事態が進行するにつれ、警戒を強めるようになる。91年8月、オーストリアのレオポルド2世とプロイセンのヴィルヘルム2世がフランス国王の地位回復を要求する「ピルニッツ宣言」を発した。以降、両国との緊張が高まった。9月30日、国民会議は「1991年憲法」を制定して解散した。

5章 対外戦争と国王の処刑（91年10月～93年1月）

91年10月1日に開会した立法議会は、ロベスピエールの提案で国民議会議員の再選が禁止されたため、多くの貴族が亡命、引退した。議会における王党派の影響はなくなり、立憲君主派のファイヤン派と共和派のシヤコバン・クラブ（ジロンド派）が争うようになった。

コラム2. ロベスピエール、議員の再選の禁止を提案

ファイヤン派を締め出すために「国王の逃亡を誘拐と呼んだことは民衆に対する裏切りの証拠である」と主張し、立法議会への議員の再選禁止を国民議会に提案した。反主流者が賛成し、提案は可決された。

5-1. 国内対立の激化、対外戦争の誘惑

91年は不作の年で、食料の不足と価格の高騰により、暴動が頻発した。内戦の兆しも広がる中、多くの党派はオーストリアとの戦争に傾いていった。

- * ジロンド派は、戦争で民衆の革命的エネルギーを消耗させることを狙った。
 - * ルイ16世はフランスが戦争に敗北して国王の権威が回復することを期待した。
 - * アントワネットはフランスと開戦するよう、兄のオーストリア皇帝レオポルド2世に再三迫った。92年2月、ついに、レオポルド2世はフランスを非難する声明を出し、戦争は避けられない情勢になった。92年4月、立法議会はオーストリアに対する宣戦布告をほぼ全会一致（反対7名）で決定した。
 - * アントワネットはフランスの軍事計画をオーストリアに内通した。（後に発覚）
- 92年4月、オーストリアと開戦。しかし、フランス軍は劣勢に立たされる。士官の半数が亡命している上、貴族の士官と第三身分の兵士の対立が足を引っ張ったためである。さらに、プロイセン軍が迫ってくる。

5-2. 国王と外国の結託・王権の停止

92年7月、「祖国は危機にあり」と非常事態宣言が出され、志願兵が募集される。

コラム3. ロベスピエール、戦争に反対し、民主的憲法の制定を主張

2月、「戦争は宮廷の陰謀である」として、戦争に反対したが、孤立した。

7月、国民衛兵に「重要なことは国民公会を招集させ、民主的な憲法と社会体制を作ることだ」と演説

同8月、オーストリア・プロイセン連合軍司令官が「国王に危害が加えられるなら、永久に記憶される見せしめの復讐を行う」と声明を出した。アントワネットが声明を要請したが、意図とは異なる過激な内容になってしまったという。民衆は外国軍、ルイ16世、亡命貴族が結託したと疑念を深め、王政に同情的だった民衆も反王政に転じ、全体が国王の廃位を要求した。8月10日、民衆はコミューンを組織してチュイルリー宮を

襲撃し、スイス人傭兵と交戦、王宮を占領した。（「8月10日事件」）立法議会は王権の停止を宣言し、ルイ16世をタンブル宮に監禁した。また、国民公会議員の選出にあたり、男子普通選挙制を決定した。さらに、封建地代の無償廃止を決定した。（実施は翌年）

5-4. フランス軍がプロイセンに勝利

民衆は王権の停止に士気が上がり、戦争志願者が急速に増加した。兵員数、装備で劣るフランス軍だったが、9月20日、北部ヴァルミでプロイセン軍に勝利を収めた。プロイセン軍の士気の低さも勝因だったという。同じ9月20日、男子普通選挙を経て、国民公会が成立した。立憲君主派のファイヤン派は8月に解散しており、共和派のジロンド派と山岳派が主導権を争う。国民公会は共和政の樹立を宣言した。【第一共和政】

5-5. 国王と外国の内通が発覚、国王の処刑に発展。

急進化したコミュニケーションの影響を強く受けるようになった山岳派は国王の処刑を持ち出し、ジロンド派と厳しく対立した。11月、王宮の秘密の棚が発見され、オーストリア王家・亡命貴族・ルイ16世の内通を示す書簡が明るみになる。国民公会は多くの議員が処刑に躊躇する中、公開投票の末、僅差で国王の処刑を決定した

コラム4. ロバスピエール、国王の処刑を主張。民衆の拍手と怒号が反論を封殺

12月、「祖国が生き延びるためにルイは死ななければならない」と演説した。民衆は傍聴席に陣取り、「拍手喝采と怒号」によってロバスピエールに対する議員の反論を封じた。「世論による専制支配」だった。

93年1月21日、ルイ16世の死刑執行。パリは平穏だったという。

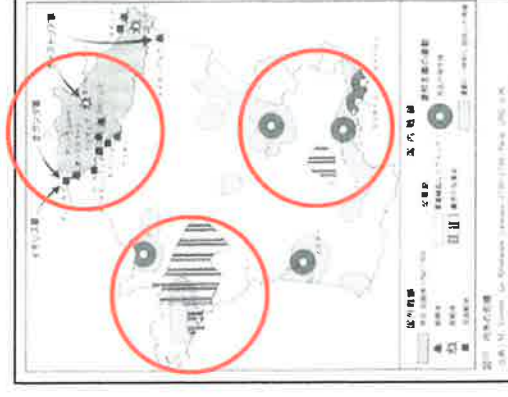
6章、対仏大同盟と恐怖政治（93年1月～94年7月）

6-1. 対仏大同盟の結成

92年11月、フランス軍はオーストリア軍に勝利して、ベルギーを掌握した。諸国の民衆から歓迎され、フランス軍は解放軍となった。フランスの影響拡大に危機感をもったイギリスは、ルイ16世の処刑を口実に93年2月、プロイセン、オーストリア、ロシア等と第1回対仏大同盟の結成を主導した。フランスは長い国境線での戦いを余儀なくされ、3月、ベルギーでオーストリア軍に敗北した。仏軍司令官デュムーリエは亡命した。

6-2. 農民反乱やブルジョワの反乱

93年2月、ジロンド派政府は兵員増員のため、30万人募兵を決定。3月、ヴァンデ地方で募兵に反対して農民8万人が反乱を起こした。背後で誓約忌避僧侶が煽動したといわれる。リヨン・ボルドーなどの大都市では、山岳派の指導者が殺害された。ブルジョワ層が革命政府の急進性や私有財産維持に対して不安を抱くようになったためとされる。



6-3. 内外危機から山岳派独裁体制へ

ベルギー戦線で敗北したデュムーリエとの関わりを追及された山岳派のダントンは、93年3月、「革命裁判所」、反革命「監視委員会」、「公安委員会」の設置を提案し、批判をかわした。これらは恐怖政治を進める機関になっていく。

5月、山岳派は穀物とパン価格の上限を決める最高価格法を導入した。しかし、ジロンド派は最高価格法に反対し、民衆の反感を買う。

コラム5. ロバスピエール、民衆に蜂起を呼びかける

5月、「国民公会のすべての腐敗した議員たちに対して蜂起せよ」と民衆を扇動した。

6月、民衆が蜂起し、ジロンド派議員29名は逮捕、追放される。以降、山岳派の独裁が始まる。

6-4. 吹き荒れる恐怖政治の嵐

93年6月 山岳派は男子普通選挙など民主主義的な「1993年憲法」を制定。(戦時中につき実施は凍結。)

9月 山岳派内の勢力争いは激しさを増す。急進性を競い、恐怖政治に突き進んでいく。

コラム6. ロバスピエール、恐怖政治を正当化する

10月、「恐怖なくして徳は無力であり、人民を感わず陰謀家は恐怖で破壊しなければならぬ」

10月 マリー・アントワネット、ジロンド派ブリソナーら21名を処刑。

11月 三頭派バルナヴァーヴらを処刑。

94年3月 山岳派内部の闘争がし烈になる。最左派のエベールらを処刑。

4月 山岳派右派のダントンを処刑。処刑された人数は10ヶ月間で2600名に達した。

コラム7. アントワネットとフェルセン、奇跡の純愛

19世紀後半、スウェーデンで発見されたフェルセン宛のアントワネットの書簡は、軽薄と見られていた王妃の人物像を一変させたツヴァイクという。革命が迫り、取巻きが逃げ出した後、アントワネットを支えたのは愛人フェルセンだった。さらに、囚われの身となった王妃には周囲の人々の心をとらえる不思議な魅力があり、革命派の監視者はしばしば協力者に転じ、王妃の脱獄を計画したことさえあったという。「ベルサイユのバラ」が世に出て半世紀、アントワネットとともに今も根強い人気を誇っている。その背景には、ツヴァイクが感嘆した王妃とフェルセンの奇跡の純愛があるのかもしれない。

6-5. 対外戦争の勝利からロバスピエールの処刑【テルミドールのクーデタ】

93年8月に実施された徴兵制により100万人の軍隊が誕生すると、93年秋には戦局が好転し始める。

94年6月、北部のフランドルやフルーリュスの戦いでオーストリア軍に勝利を収めた。

以降、対外的な危機は遠のき、戦時体制の存在理由は失われた。93年7月の封建地代の無償廃止により、土地を所有した農民は革命の進展を望まなくなった。パンの最高価格制は失敗し、民衆は食料の不足に不満を募らせた。ブルジョワは窮屈な経済統制に反発した。一気に不満が高まり、ロバスピエールは孤立した。

94年7月27日、ロベスピエールによる粛清に怯えた議員たちは先手を打ってロベスピエールを銃撃戦の末に逮捕、翌日処刑した。恐怖政治は終焉を迎えた。【テルミドールのクーデタ】

7章 革命の終焉とナポレオンのクーデター（94年7月～99年11月）

7-1. 総裁政府の不安定な政権運営

1789年の革命の開始から1794年のロベスピエールの処刑までは激動の5年間。一方、その後の総裁政府の成立から1799年のナポレオンの権力奪取までの5年間は「退屈な時代」とも評される。ジロンド派とジャコバン派が弱体化し、共和派の中間派が権力を掌握した。しかし、多数派を形成できず、不安定な運営を余儀なくされる。

95年8月 自由主義的「1795年憲法」を制定し、民主主義的「1793年憲法」を否定。

95年8月 「三分の二法」を制定し、五百人会の2/3の議員は抽選で議会に残るようにした。

95年10月 国民公会、解散。五百人会と総裁政府が発足。議員の2/3が残る議会に民衆は失望。

95年10月 王党派が蜂起し、国民公会を占拠。（ヴァンデミエールの反乱）

ナポレオンが鎮圧し、頭角を現わす。

95年12月 前年に最高価格制を撤廃。物価は100倍に跳ね上がり、暴動が頻発した。

この頃 亡命していた王党派が帰国し、反政府活動を活発化させる。

97年3月 王党派が議席を伸ばすと、政府は軍隊を使って王党派議員を追放した。

98年3月 左派が議席を伸ばすと、政府は左派100名の当選を無効にした。

→軍隊にたより、議会のルールを自ら破る総裁政府は、民衆の支持を失っていく。

※97年1月 ナポレオン、オーストリア軍を撃破し、ベルギーと北イタリアを獲得。名声高まる。

7-2. ナポレオンによるクーデタ

総裁政府はイギリスへの対抗姿勢を鮮明にし、対立が激しくなっていく。

98年12月 第2回対仏大同盟（英・露・墺・トルコ・ナポリ）が結成される。

→フランスはロシア軍に敗北、イタリアを失うなど多くの戦線で後退を余儀なくされた。

99年8月 王党派が対仏大同盟に呼応して、ツーロンで反乱を起こす。

99年10月 ナポレオンはフランスの破滅的事態にエジプトから極秘に帰国した。

打つ手を失った総裁政府は軍のクーデタを決断、ナポレオンに接触。

ナポレオンは御しやすいシエイエスと組むことを決めた。

11月9日 クーデタを敢行、権力を奪取した。【ブリュメール18日のクーデタ】

99年12月 自由主義的「1799年憲法」を制定。※「1795年憲法」の分権主義を否定。

ナポレオンは「革命は終わった」と国民に声明を発した。

8章 最後に

この10年間を経て、封建制は廃止された。ギルドは廃止され、営業と所有の自由は確立された。多くの農民は自作農になった。国王は処刑され、絶対王政は絶たれた。しかし、国王の処刑を機に対外戦争と内乱の危機

が深まり、恐怖政治から革命の成果は風前の灯火となった。

ナポレオンによるクーデタの直後に貼り出された街角の壁新聞が、当時の人々の気分を伝えている。

「フランスは法を執行する権力の統一性を求める。・・・フランスは 10 年間の犠牲の成果をかりとることを望む」これこそが、ナポレオンに託されたものだった。

コラム8. 恐怖政治の原因

ロベスピエールは、「我々の危機は民衆の代表者が陰謀をたくらんでいる点にある」と、しばしば「陰謀論」を展開した。そして、92 年 8 月に王政が倒された後に、彼は語っている。「共通の敵が倒された今日、人々は 2 つの陣営に分かれる。一方は自分たちのために共和国をつくろうとし、他方は人民のために共和国をつくろうとする。」民衆の利益を考える彼には、ブルジョワの利益を考える多くの議員が強欲な陰謀家に映ったのだろう。「自分たちのために共和国をつくろうとする」とは直接にはジロンド派を指すが、最終的には彼と彼の弟以外のすべての議員が含まれるかもしれない。議員に対する不信に根ざす陰謀論、これが恐怖政治の第一の原因と思われる。

普通選挙の実施、国民公会の樹立、王政の廃止など社会のあるべき方向を示し、かなりな部分で実現してきた彼の言動が、国王処刑の演説を行って以降、政敵のせん滅を煽る言動に変わっていくのは極めて示唆的である。ジロンド派の追放の直前、彼は「民衆を怒らせる必要がある」と書いている。そして、日当を渡された民衆が国民公会を包囲し、ジロンド派を襲撃した。内外の危機が深まる中、最後に残った政敵は同じ山岳派内の過激派であり、彼は民衆の人気を得るため急進性を競い合った。この急進性の競い合いが恐怖政治の第二の原因であろう。おそらくは革命の最大の功労者でありながら、パリには“ダントン通り”のように、彼の名前を冠した通りはないという。それでも、ロベスピエールは自由主義に対抗する民主主義の旗手として、世界史にその名を刻んでいる。

筆者は、フランス革命はナポレオンの治世を含めて完結すると考えている。「フランス革命がなければナポレオンはなく、ナポレオンがなければフランス革命もない」のである。ナポレオンの活動は多方面にわたる。独裁者、軍事天才、革命の輸出人等、その評価は人により様々である。しかし、彼がたんなる独裁者や軍事天才に過ぎないとすれば、後年彼の甥をナポレオン三世としてフランスの大統領や皇帝に押し上げていく「ナポレオン伝説」は生まれただろうか。ナポレオンはフランスに何を残し、それは世界史にどう影響を与えたのかを考えることが、後編「フランス革命—ナポレオンの時代」のテーマである。

【参考文献】

- * 「世界の歴史 14 絶対君主の時代」「15 フランス革命」「16 ヨーロッパの栄光」（以上、河出書房新社）
- * 「世界歴史体系 フランス史 2」「世界歴史体系 イギリス史 2」（以上、山川出版社）
- * 「世界各国史 フランス」（山川出版社）
- * 「世界史リブレット ロベスピエール」（松浦義弘著、山川出版社）
- * 「フランス革命史」（上下）（ミシュレ著、中公文庫）
- * 「マリー・アントワネット」（上下）（ツヴァイク著、岩波文庫） 他